

熊本県豪雨災害被災地への人的支援

社会福祉法人 協同福祉会
経営政策室 森本 貴彦

2020年7月4日未明から熊本県に豪雨があり、その影響で球磨川の氾濫が起こり周辺の住居など町が飲み込まれました。当時は熊本県を中心に2千人以上の避難生活者がおられ、死者65名で65歳以上の高齢者が85%を占めていました。

今回は、NPO法人コレクティブの川原代表が熊本の震災時に支援組織を作られました熊本県災害派遣福祉チーム（熊本県DCAT）に加わり7月10日～7月19日まで支援をさせていただきました。

支援の内容は、被災家屋の掃除や流されてきた物の撤去ではなく、避難所に避難されている要援護者の方々に話を聞き、チームで解決できることがあれば完結をしようとする支援でした。

この支援は、心のストレスを少しでも軽減し、辛い気持ちや心配事など抱え込まないで気持ちを吐き出して溜め込まないようにすることが大きな目的でした。

気持ちを言葉にして出せる人は、被災にあった様子や心配なことを話は出来ます。また自由に動ける人は、住居の様子や片付けができます。しかし、話を苦手とする方や自由に動くことが難しい方は避難所の生活により一層のストレスが溜まります。

そのストレスを軽減するために、避難されている要援護者と話をして馴染みになることで色々な話を伺うことが大きな支援でした。

「他県で水害や地震などで起きた様子を見て、他人事とっていたけどまさか自分の家に川の水が溢れてくると思ってもいなかった」

「夜中に家の中まで水が入ってきて、荷物を2階まで上げていたが消防署の方が逃げないと危ないと言われ水につかりながら2階の窓から逃げた。その後家が流された」

「みんな流された、家も何もかもがなくなった。こんなやつたら死んだ方がましや」

「去年に家を建て替え、孫やひ孫が泊まれるようにした。ここは大丈夫とっていたのに、大変なことになった」

「気が付くと布団が濡れて来たので起きた、避難放送が流れていたが雨の音で聞こえなかった。流されると思い窓から出た。お金も服も薬も入れ歯も何も持ち出せなかった」

「逃げるのに必死で、生きていて良かった」

山間部に住んでいる方の中には、山崩れの為移動の交通手段がなく自衛隊のヘリコプターで救助され1次避難所から現在のいる避難所に車で3・4日かかっている方もいた。思った以上の山崩れがあり、移動手段が自衛隊のヘリしかなく救助に時間がかかった様子も聞くことができました。

避難所にいる方の中には、「ここには食べるものや最低限必要なものがありみんな親切にしてくれる。あなた方みたいに、話を聞いてくれる人がいるので感謝している」と感謝の話も聞かせて頂いた。

避難所は、高校の廃校跡・小中学校の体育館・保健センター・市立のスポーツセンターの体育館などが使用され、毛布・水・消毒液・お弁当・衣類・食べ物・段ボールの組み立てベッド・マットレスや枕・自衛隊の簡易お風呂・エアコンの設置・支援団体など日を追うごとに避難所への支援が揃ってきていることが分かりました。

支援が整う一方で、新型コロナウイルス感染対策も手が抜けません。避難所の出入り時の消毒や検温などを徹底してウイルスを絶対に持ち込むことを避けたいといけませんでした。

一番の感染対策でもある定期的な換気が難し状況です。7月に入り外気温も上がり冷房設備もままならない中で、多くの方が快適に過ごすことは至難の業でした。

大勢の方と過ごす上で、プライバシーの確保が必要ですが、膝までの仕切りとベッドだけで全体を見渡せた状況から仕切りのカーテンが設置された後は、風通しも悪くなり換気が不十分なことや被災者の所在が見えないことから盗難が発生するなどデメリットも表面化してきました。この状況は熊本の地震発生後の避難所でも同様のことが発生して、DCATのリーダーは、教訓化されていないと行政の方々に発信をされていました。

日を追うごとに被災された方々の話しも少しずつ変化し、「薬がない」＝保健師に繋ぎ、薬はいつ届けられるかを確認して当事者に伝える。「お風呂に入れていない」＝見守りが必要なら一緒に入浴支援をする。「サンダルが欲しい」＝支援物資から探して利用してもらう。「エアコンが効きすぎて寒い」＝長袖下着や衣類を準備する。「洋式トイレに並ばないといけない。間に合わない」＝避難所の責任者にトイレの使用方法を助言

すべての避難所に自衛隊の風呂があるわけではないので、家族の許可を得て高齢の本人と日帰り温泉に行くこともありました。DCATの車両を使用して一緒に入浴して「やっぱり温泉が一番や！」と被災したことを忘れた様な表情が印象的でした。DCATの動きは、小規模多機能らしい支援と感じました。

私たち以外にも、医療チームや保健師チームなど様々な支援チームが結集され、情報共有のため毎日連携会議が開かれていました。支援をしていると、身体能力や認知機能低下の方からは「いつまでここに居られるかな」「皆親切にしてくれるから安心です」「近所の人たちがいつも気にしてくれるので大丈夫です」と話をされていた方が、医療チームの判断で病院送りされたことが分かれると何とも言えない気持ちになりました。（馴染みの地域の方々と離れて暮らすことが本人にとってどうなのか？ 病院ではなく、介護施設等を探すことは出来なかったのか？など）

協同福祉会からは、熊本県災害派遣福祉チーム（熊本県DCAT）に8月の約1ヶ月間5名の支援を送り込み、心のケアから入浴介助や避難所の環境整備など行い貴重な経験を致しました。今後起こりうる可能性がある、不足の事態に生かす取り組みになったと思います。

仮説住宅の申し込みも一部では始まりましたが、避難所に誰もいなくなるまで時間はかかります。熊本県災害派遣福祉チーム熊本県DCATの方が話をされていました。被災された方が、いつもまでも避難所にいることはできない。次の居場所を考え背中を押すこともしなければならない。そのためには、今後の事を思うと自立支援を考えながら支援をすることが必要だと話されていたことは印象的でした。

8月8日に全国地域包括ケアシステム連絡会村城代表理事と大國事務局長と共に九州豪雨災害熊本県被災地支援募金を熊本県地域密着型サービス連絡会の川原代表と社会福祉法人グリーンコープ金羽専務理事に被災された方々へのお見舞いの言葉と募金を手渡しさせて頂きました。その機会に球磨川が氾濫した人吉市球磨村を訪れました。想定を超える浸水が村を襲った状況は目を疑う状況でした。

「一部分が流された鉄橋」「なぎ倒された電車の高架」「球磨川に沿って走る道路木々の上部に流されたごみが張り付いている（はるか下に見える球磨川の水位が上昇）」「家の骨組みだけが残されている」「村の様子は色がなく泥色で覆われている」

このような光景がある中で、懸命に復旧作業をされている住民の方々やボランティアの方々の姿が印象的でした。復旧にはどれくらいかかるか分かりませんが、住み慣れた場所で再び暮らしていきたいという気持ちがあるのだろうと思いました。

まだまだ支援は継続されています。心のケアや物資などの支援されている団体への寄付を募っております。

引き続き皆様のお気持ちを、今回の熊本豪雨による被災された方々を支援する団体に寄付をよろしくお願い致します。